

〔資料〕

## 折口信夫「発生日本文学史

平安朝に於ける

## 声楽と民謡との関係」

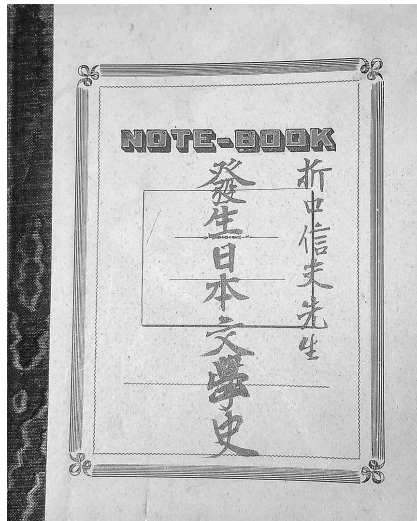
(國學院大學講義)

伊藤 高雄 編

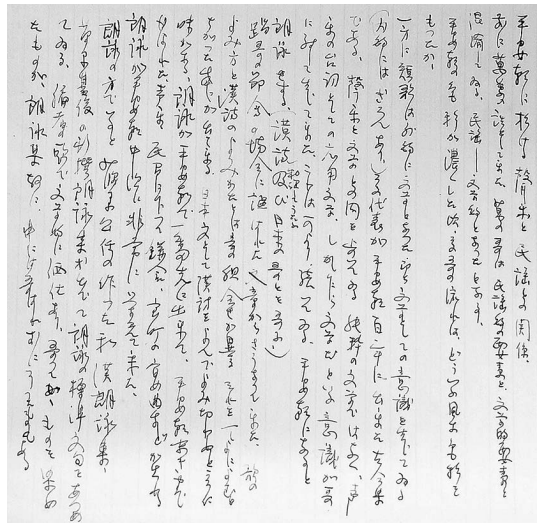
〔凡例〕

・本資料は、国文学者・民俗学者、折口信夫（釈迢空）が大正末年から行なった講義・講演を、学生で門弟であり、昭和六年から八年まで助手を務めた小池元男氏が筆記したノートの一部である。資料の解題は、先に國學院大學栃木短期大学国文学会の『野州国文学』第八十六号（平成二十五年三月）の「小池元男ノート―折口信夫・郷土研究会ほか講義ノート―」、及び『國學院雜誌』第百十四卷第十号（平成二十五

年十月号）の「折口信夫・國學院大學講義その他―小池元男・石上順ノート―」に報告しているので、そちらを参照していただきたい。・本号に翻刻する資料は、ノート番号49の「発生日本文学史」（筆記年時不明）に整理されている「平安朝に於ける声楽と民謡との関係」である。表記は原則として常用漢字とし、古典的仮名遣いとしたが、場合によって正字を用いたところもある。判読できない箇所は□で示した。



表紙



一頁目

## 発生日本文学史 平安朝に於ける声楽と民謡との関係

前に萬葉の話をして来た。萬葉の歌は、民謡的の要素と、文学的要素と混淆してゐる。民謡——文学的となつたといふ事。

平安朝の色彩が濃くした頃、その歌の流れは、どういふ風な色彩をもつたか。

一方に短歌は外的に文学となつた。即ち文学としての意識を生じてゐる（内的には議論あり）。その代表が平安朝百年に出来た古今集である。声楽と文学との間を歩いてゐる。純粹の文学ではなく、声楽の台詞としての応用文学。しかしながら文学だといふ意識が歌に對して生じて来た。これは萬葉より続いてゐる。平安朝になると、朗詠をする。（漢詩——和訳して歌ふ——及び日本の歌とを歌ふ）。

踏歌の節会の場合に謡はれた文章からさうなつて来た。歌のよみ方と漢詩のよみ方とは音の組合せが異なる。

それを一緒によむ。ちがつた感じが出て来る。日本文学として漢詩をよんでよみ切れぬところに味がある。朗詠が平安朝で一番先に出来て、平安朝末期まで行はれた。声楽、民間に下つて鎌倉、室町の宴曲などが生れる。朗詠が平安朝中頃に非常に榮えて来た。

朗詠の方でいふと、藤原公任の作つた和漢朗詠集、藤原基俊の新撰朗詠集等出でて、朗詠の標準文句を集めてゐる。編者の頭で文学的に価値あり、歌つていゝものを集めたものが、朗詠集故に、中には歌はれずに了つたものもある。

和歌と漢詩と対立させたもの。平安中頃のものは声楽として進み、文学として低くなる。いゝ句だけ抜いて来るようになるが、はじめの傾向は、歌があるとそれを七言絶句に訳して詩を作り、双方を歌つたものらしい。書物の性質からさう言へる。一番最初には新撰萬

葉集（菅家）である。古今集より古く、道真の編故に菅家萬葉集と云ふ。上下巻によつて編者が違ふ。奥書が違ふから上下二巻別に出来たものと考へられる。此本で道真のした部分は漢詩に直したのである。ともかく謡ひ物として書物の上で見られる出発点としては新撰萬葉を見ねばならぬ。古今の頃、

古今 文学

新撰萬葉集 声楽と文学

声楽としたもの

朗詠は今の宮内省でやつてゐるものではないのである。中絶して了つたのを、今またやつてゐるのである。

謡ひ物は、文句と意味と併行せねば進まぬ。

平安朝の声楽の話は、朗詠をたどればよい。

われ／＼が今見られる範囲で立派に神の前で奏する歌だと云ふ事が出来るのは、古今巻二十の大歌所の歌、東歌である。——古今で一ふよいは番外の二十巻である。当時の文学論が悪かつたのである。日本文学の短歌の出発点が違つてゐるのである。

巻二十は、神事の声楽の歌である。この大歌所の歌が

まづ神事の歌として編纂された一番古いもの。この中に時代不明の鎮魂歌タマシヅメがある。巻二十の大歌所の歌の芯になつてゐるものを見ると、採物の歌といふものがある。主なのは、神事の歌で、大直日歌、神遊び歌、次に採物の歌が出る。

（あそびは鎮魂舞踊。）採物によつて歌の文句が違ふ。恐らくはじめは、この矛は何だといふ様な採物の由来をといたのである。この形は後世まで残つてゐる。平安朝中頃、一条天皇の頃ゐた一条左大臣源雅信が、テキストを作つたと云はれてゐるところの、神楽歌譜がある。この人は声楽と関係の深い人である。神楽歌譜を見ると、古今の神遊びの歌と同じものあり、神楽歌譜より出たものが古今集の神遊びに採り入れられた。書物記載の時代で実際の後先は決定せられぬ。記録せられずとも下に流れてゐるのである。そして亡ぶものと定本を得て固定するものとある。

神遊びと神楽といふ事は、殆んど同じことらしい。神楽と書いてあつても、先輩等がかみあそびと読みたがるが、これは同じものだが、時代によつて云ふ仕方が違ふ。等しく神前で舞ひ謡ふのは同じいが、中心の精

神が違ふ。神楽は後に宮廷に入つたもの。此語が前の神遊びを併合し、神遊びより複雑になる。

鎮魂歌は普通非常に古いものだと云はれてゐるが、こゝとばがわからぬところから云はれてゐるが、それは歌ひ手が謡ひ違へた為だ。謡ひ物を歌ひまぢがへ、定本を作ると、正しいものが、誤りとなる。鎮魂歌は、神遊歌中の採り物の歌。神楽と鎮魂が神遊びと何か関係あり。とにかく謡ひ物が替へ歌等の関係で文句がかはる。鎮魂歌は謡ひ物として大切なだけでなく、歌が違ふ。

神楽とは外から入つて来たもの。

神楽とは、移動する神座を持つた旅行者が神をもつてゐる。その神座を露骨にもつて歩く人々がゐた。それがかぐら。かぐら、かみくら↓かぐらと云つてゐる説は古くからあるが、神くら↓かぐらといふ事になるのである。移動するかぐらを携へて歩く人々のする宗教舞踊が即神楽である。神楽あそび、神楽まひ等いふのであらう。

この神楽がどこから宮廷に来たか。

神楽そのものを見てわかる事は、神楽のはじめに庭で

火を焚く。たてあかしと云ふ。

たてあかし白くせよ。お、。

とて灯火に入れる。次にあちめ阿知女といふ。

又、お、といふ。即、阿知女作法をする。今まであちめはうづめといふ事だ。神楽のはじめが、うづめの命だから、うづめの事だといふてゐる。い、かげんな事である。

神楽歌の中に歌はぬ歌がある。磯良崎、

伊勢の海海人の刀祢らが焚くほのけ

磯良が崎にかほりあふ

の歌を歌ふと凶事があると歌はれぬ。

磯良が崎といふ事に意味があるらしい。神楽の由来はわからぬが、太平記に由来が記されてゐる。

あぢめの磯良を呼び出す為にしたのが神楽で、後には安曇の磯良丸といふ神の様な名になる。すると、あぢめといふ事は、あづみと同じ。

あづみの家は海部を取りしまつた部曲の民である。

筑前の志賀島は、日本中の海部の根拠地であつた。

あぢめ、あづみのいそらといふものが神楽の起元伝説についてゐる。すると、いそらと神楽との関係深い。

あちめといふことも、あづみらしい。音韻変化を無制限にやつて行くのはよくないが、あづみ、あどめは疑ひなく同じこと。このあちめ作法がある為に、あづめの所縁を説いたのか、所縁があつて、あちめ作法が起つたのか不明だが、あちめ作法をやると、お、と応へて阿曇の磯良が出て来る。

神楽歌譜には外に一とところ歌ひ方をかへて、しかさへずる声と云ふ注を加へたところがある。しかは志賀島、さへずるは声楽の囀である。舞人が歌ひ乍らするのが囀である。意味のわからぬ歌、意味わかるのは詠といふ。日本で病的に早くから訓読したのは音楽者で、囀をさへずりと訓んだ。訓み違ひではあるが、南蛮の語を鳥の囀りに見たのだと云へど、考へて見ると、あまがもつてゐるあまの舞ひに行ふところの囀といふ事である。

神楽は志賀の島のあまと関係深い。しかをいひ、いそらが出て、とめ歌となつてゐるのを見ても、で、あまのさへずりも、平安朝の考へ方と違つて、あまの持つてゐる舞の中の囀に関するものといふ事。

神楽歌といふものは、他処から宮廷に入つて来た。し

かも、神楽の語は平安朝になつて出る語。もとより宮廷にあつたものでなく、何時かわからぬが、平安朝のはじめに宮廷に入つて栄えたもの。

今の神楽歌譜は、石清水の神楽と関係深い。その石清水のものが、宮廷にいつたのか、同源で、二つに分れたのかは結着はつかぬ。まづ石清水系統の神事舞踊といふ程度でとめておく。石清水の神は九州より東なした神で、あまと志賀島と関係深い神である。

今度の問題として残すべきは、神楽は海部のもつてゐた神遊びの音楽が神楽。宇佐の信仰が東上するにつれて、神事舞踊も東漸したと考へる。

#### 催馬楽

一条左大臣源雅信の撰した催馬楽譜といふものがある。

平安朝の散文学はたるいものが多いが、謡ひものを先にした方がよい。中、殊に面白いのは催馬楽。風俗と合せて読むと興味が出て来る。風俗と催馬楽を関係づけて話す。

現在、催馬楽にはあちめ作法のついてゐるのは、神楽

のまね。名称の起元に就いて、催馬楽は後、唐樂の中に數へられる故に、支那のものを模倣したとする説これは誤り。

馬を催し立て、お宮へみつきものをもつて行く樂だと云はれてゐる。もつとも日本の雅樂では、樂と訓む。樂といふところから、又唐樂の中に入れたのは唐樂の調子で奏したに過ぎぬ。唐樂の中に日本のものが入つても入つてゐる中で、文字面からこれのみ唐傳來とし、催馬樂だと云ふ。

又一つ、催馬樂の中にわが駒と言ふ歌がある。

いでわが駒早くゆきこせ まつち山まつらむ人を行きて……

といふのから馬を催す催馬樂だといふと。

又一説、神樂歌中の前張り、大小に分れてゐる。この名のわけ方は、

さきはりに衣は染めむ。雨降れどうつろひ難し深く染めてば

さきはりは、榛の木でなく、草である。花卉の色が濃い赤、それで衣の色をすつたのである。

さきはりで衣を染めやう。雨が降つてもさきはりで

染めた

この歌よりさいばりと云ふ名が出来、大小の前張に分れてゐる。催馬樂と言ふのは、神樂歌のさいばりから出てゐるといふ。

私は、これは動かせぬと思ふ。それが訛してさいばりとなり、催馬樂と宛てた。そこには時代の連想からの文字を当てたのである。前張りより出て、音が變つてさいばりとなり、合理觀を加へて催馬樂とした。

神樂歌の一は採物、二前張、三早歌（問答歌）、四が晝声の四種に分れてゐる。その中、恐らく二の部分を興がつて面白がつた。今度は二だけを取り出して一部分とした。

神樂は歌と舞ひとあり、その中で謡つて面白いのは大小前張り。それを取り出し、それが次第に発達しても謡ふばかりで催馬樂となつた。日本の古い小歌が次第に唐樂めいた調子で歌ひはじめたのである。そして、催馬樂は本當に独立した。

即、神樂の前張から出たもの。

つまり宮廷や貴族の間で昔の民謡がしかつめらしく謡はれる様になつた。催馬樂の神樂と違ふところは歌体

多く、短歌が基準となつてゐない自由な、譜の数の多いものであつた。

その譜の数の多い民謡が盛んになつて来たのは、平安朝の民謡の特徴で、一つ／＼のものそのものにも変化を生じ内容に於ても極く自由なものを出す。

日本の民謡の底を流れてゐるのは、恋愛の歌。その恋愛の流れ方が変化し、時代と共に下が、つて性慾的になつて来る。奈良朝頃には、純粹な愛のものはないが、明るかつた。それが次第に暗くなつてくる。つまり奈良朝及び以前の歌は、性慾に拘泥してゐない。平安になると、性慾と恋愛と分れ、前者を歌ふ人がよることゝ歌ふことになつて来る。謡ひ乍ら面白いと思ひ、外国音楽の調子で謡ふ。催馬楽でも極つた恋愛を面白がつてゐる。平安末より鎌倉にかけて、これが極く多く、梁塵秘抄などこんな歌ばかり。

つまり嫉妬を謡ふのである。政治上の区画と芸術と一致しないのは、言ふまでもないことである。鎌倉になると、恋愛に悲観した、やるせないものが興り、ずっと続いて今に至る。室町になつてくると、恋愛そのもの、複雑さを歌つてよるこんでゐるものが出て来る。

恋愛の諸相を楽しむ歌が出来て来た。根本はやるせない気持。

室町・江戸になると、民謡の古典復興の時代になり、古い歌の気分が再現する。歌謡ひが昔の歌を謡ひ、又、昔の歌にまねて新作する。故に、江戸の歌は古典的なもの、古典的なもの、支配を受けずに新作出来た。

小唄の主題はやるせない恋といふ事である。弄齋節も、実は癆の病の名前だとさへ云はれる位である。やるせない気持ちが、一時分色として出た。

江戸になると性慾そのものを扱つたものになる。一つは軟派文学を起す原因とさへなつてゐる。それほど小唄に力があつた。昔の人は文学に似た趣味を整理する事は僅で、民謡で支配されてゐる頭に入り良いものは性慾文学である。

日本の民謡史上の恋愛を探ねると面白い。

性慾的のものが露骨に歌に出て来るのは催馬楽。一体日本人が歌や文学に露骨に性慾を扱ふのは、理由がある。神様が好きであつたのだ。性慾と便所文学と、ほら話は共通の話題であつた。さういふ気持ちから神様にえみさかへて貰へると思ひ、神の耳を引き立てるや



うな事をいふ。逆に神話の上に乗って、さうした事が入つて行く。

神楽歌から出たのは、催馬楽にこんなものが入つて来た。

ひどいのは、つばの名である。

一方に世の中に高踏な自由な生活に対して、下層の事を謡ふと神経がやすまるのであらう。大芹等がこれである。つまり貴族等がわれ等の生活の根柢をゆるぐやうな歌を古楽でうたつてよろこんでゐたのである。今日は何であるかわからぬ。

この催馬楽は、平安朝以前のものであると昔から云はれてゐる。平安以前の民謡が謡ひ伝へられ、語が変化し、新しいものと交替し、一条天皇の頃に、今伝つてゐるものが固定した。老鼠、

西寺は、元興寺これがあすかの西寺。こゝに関する事から流行した歌である。

壬申の乱を暗示したものと云はれてゐる。

西寺の老鼠 若鼠、御裳つんず、けさつんず、法師に申さん、師に申せくく

大友皇子に警告を与へたと言ふのだ。

催馬楽の中に歴史的背景を考へられるものがある。当推量にしても。奈良以前のものが催馬楽に入つてゐるのは事実。神楽は日本流の古い声楽で謡つた為に調子が違ふ。宮内省の神楽を聞いても変つてゐるが、文句を見ると、声楽の制約をうけて、ゆるい。催馬楽は、唐楽の影響で文句の組み方が、がつしりしてゐる。この点が、われくが催馬楽に引かれる点なのだ。「あげまきや」の能の翁の神歌の文句に入つて有名な歌であるが、

あげまきやとうく、ひろばかりやさかりてねた

ねたれども、まろびあひにけり、かよひあひにけり

翁では、なりものがよく出来るとして謡つたのだ。

大体長いか短いもの、力なき蛙。

力なき蝦、骨なきみ、ず

これは神楽の早歌の部分に属してゐたものである。西寺の歌は、昔の人の考へてゐる童謡なのだ。わさうたは子供の歌に、人が意義を感じた時に云ふ。

この経験が進んで来ると神が子供のうたふ歌で、流行して来ると変な感じをもつて来る。そして合理化して

事変と結びつけて考へたのだ。

萬葉にも壬申の乱を暗示したと云ふ、いかるが、比米の歌あり。催馬楽の中にはわざうたに属するものがある。例へば、貴族出の歌もある。

酒をたうべて、たべゑうて、たむとこりむぞ、詣で来る、よろほひぞ詣で来る、たんなく、たり、ら、

これは宮廷の宴会の歌で五節の歌と似てゐる。

かういふ歌が、朗詠の一部分、である。即ち日本の文句は、五節の歌であるが、その系統のものが、催馬楽に入つてゐる。それから、も一つ。神楽と催馬楽に結著をつける為に、東遊びと風俗、これ等の譜も一条雅信作ると云ふ。

今では両者別者らしいが、これは一つものである。丁度、神楽出の催馬楽の如きである。飛躍し、且つ舞ひのないのと同じく、も一つのものが二つに分れ、東遊びは舞を主とし、風俗は歌を主として舞はぬ。雅信の風俗の外は舞はないとは云へない。国々奉上の風俗は別。

歌と舞と併行中、歌のみが面白い為に分れて歌はれる。

つまり、神事にうたつた歌が普通の人々が座興に歌つたといふ事になつて来る。すると、舞をとまはなくなると。

東遊びは、簡単なもの。一歌、二歌、駿河歌、求子歌、大広歌の五つに分れてゐる。

お、……、はれな手を整へるな、歌と、のへるな、さかむのね

長い歌の一部分をとつて一歌にしたのである。二歌、

わが背子が今朝の言出は、七つをの八つをの琴を

調べたることよ

なをかけ山のかづのけや、を々……

**奪略結婚** 足柄のわをかけ山のかづの木の 我をか

づす(誘す)さねも、かずさかずとも

萬葉の中の東歌が、形がこんなに變つて入つてゐるのは書物からでなく、伝統が奈良朝より伝つて来て、平安朝になるまでの間に、断片化したのである。

駿河歌には、東遊びの起元を説いてゐる。「有度浜」

有度浜に駿河なる有度浜に打ち依する波は七草の

妹ことこそ良しことこそ良し七草の妹はことこそ

良し逢へる時いざさは寝なむや七草の妹ことこそ

良し

伝説の東遊の起元、天人の伝説の八処女の舞ぶりを、  
道守の翁が盗んだ事に似てゐる。そしてこの歌の後半  
らしいものが風俗にも見える。

この話は後、美保に移つてゐる。

八処女はわが八処女ぞ 立つや八処女く 神の  
ます高天原に立つ八処女く

つまりこの二つを結びつけて見ると何か意味がありさ  
うで東遊びの起原伝説に似てゐる。それはともかくと  
してこゝからも風俗と東遊びがもと同じものであつた  
事が云へる。